

AFC フォーラム Forum

Agriculture, Forestry, Fisheries, Food Business and Consumers

8

2019

特集 農業人材育成の今を追う



特集

農業人材育成の今を追う

3 これからの農業を担う人材育成が急務

藤井 吉隆

人材面で厳しい状況に直面する日本農業。維持・発展させるためには、経営の高度化に対応した農業経営者の育成と、雇用労働力では優秀な人材の育成、定着が必要だ

7 民間企業も動き始めた農業支援隊の挑戦

山田 優

民間事業者が農業人材育成に積極的に乗り出している。総合人材サービス・パソナグループ「パソナ農援隊」もその一つだ。農援隊が育成を目指す担い手像を聞く

11 農業大変! 農業雇用人材の育成と定着化

澤田 守

離農者の受け皿としての機能が期待される農業法人では雇用労働力が増加しており、従業員の育成が喫緊の課題だ。従業員のモチベーションを高め、雇用の定着を図る秘訣とは

情報戦略レポート

15 オホーツク農業の担い手と新規就農の動向

—日本公庫北見支店、東京農業大学オホーツク校 共同調査—

経営紹介

経営紹介

23 株式会社ナカシヨク／新潟県 本間 春夫

養豚、採卵鶏を広域で営む。25カ所の農場は飼養条件を統一し、過去の生産データを蓄積・分析することで効率化を図る。ゆとりある掃除が行き届いた畜舎などコストより最善を追う

変革は人にあり

27 有限会社竹内園芸／徳島県 竹内 勝

将来の人手不足に備えベテランの技術である「断根育苗」を最先端のAIが担う施設を建設。国内需要の1割にあたる5000万本の苗の供給を目指す



撮影:鎌形 久
新潟県五泉市
2011年盛夏撮影

青ジソ

■シソは古くから日本で親しまれている食材で、その爽やかな香りと味、そして見た目でも夏を感じさせてくれる「和風ハーブ」の代表格だ。日差しを浴びてぐんぐんと成長し、葉を茂らせる■

シリーズ・その他

観天望気

女性たちの意思決定 原 珠里 2

農と食の邂逅

山田 千尋/東京都
青山 浩子(文) 河野 千年(撮影) 19

フォーラムエッセイ

襟を正して
斎藤 恵理 22

主張・多論百出

山形在来作物研究会
江頭 宏昌 25

耳よりな話 208回

農業経営にガイドブック
宮武 恭一 30

まちづくりむらづくり

里山をまるごと一つのホテルに
身の回りの資源活かし生業の創造
株式会社百笑の暮らし/石川県輪島市
山本 亮 31

書評

巨部 幸博 著
『珈琲の世界史』
青木 宏高 34

インフォメーション

アジア太平洋地域の農業金融発展に協力
情報企画部 35

みんなの広場・編集後記 37

ご案内

第14回アグリフードEXPO東京2019 38

9月号予告

特集は、「サバから読み解く日本漁業」を予定。資源管理の成果が表れ始め、漁獲量の改善の兆しが見られるサバ。養殖・ブランド化が進み、付加価値向上を実現するなど漁獲量拡大・消費量拡大を目指す日本漁業の方向性を示唆している。サバを通じて日本漁業を俯瞰してみよう。日本漁業および関連産業の発展の道筋が見えてくる。

*本誌掲載文のうち、意見にわたる部分は、筆者個人の見解です。

望天 観気

女性たちの意思決定

女性の就農の経緯は変化しつつある。結婚を機に農業に関わる比率が高いことに変わりはないが、経営者の実の娘の就農、そして農業法人への雇用による就職就農が特に増加している。

日本農業法人協会による「農業の未来をつくる女性活躍経営体100選」は、女性の働きやすさをキーワードに二〇一五〜一七年度の三年間で一〇二の経営体を表彰した。農林水産祭の選賞においても第五四回(二〇一五年)から「女性の活躍」部門が設けられた。就業規則や育児休業制度などの整備により、女性がより働きやすい職場を実現している表彰事例の多くは、女性が組織のトップまたは共同経営主である。女性が意思決定に関わることで女性の働きやすさが実現されていることは、農業という領域で女性の能力を活かす良い循環が始まったことを感じさせる。法人における次の課題は、部門や役割、昇進などの男女間の機会平等の達成であろう。一般企業の場合と同様、従業員の各家庭における役割分担はどうなっているかという点も問われる。

一方、小規模の家族農業は世界的にも再評価されつつあるが、家族という特別な人間関係における平等な意思決定や適正な評価の難しさが残る。農業者夫妻の場合、仕事と家庭の両方で役割分担などの意思決定をしなければならない。その困難を乗り越え、それぞれがより高いモチベーションを持てるようなコミュニケーションや意思決定はいかに実現できるのか、経営内部だけでなく研究や行政においても絶えず問うことが重要であろう。

法人であれ、家族経営であれ、それぞれの環境下で女性がさらに能力を活かすことは、農業界にとっても大きな希望となる。そして、「活躍」という側面だけではなく、それぞれの「貢献」が十分に報われているか、「男女平等」という理想と再度照らしおくことも忘れてはならないだろう。FAO(国連食糧農業機関)は農村における意思決定への参画や資源へのアクセスに関する男女平等を重要な目標として掲げ、SDGsの目標とも合致するとしてさらなる推進を表明している。これらの目標は決して遠い国の問題ではなく、日本の問題でもある。



東京農業大学国際食料情報学部教授

原 珠里

はらじゆり

1963年東京都生まれ。専門は農村社会学。(独)農研機構中央農業研究センター、東京農業大学准教授などを経て、2013年より現職。主著に『農村女性のパーソナルネットワーク』(農林統計協会)。

生産者も買い手も納得し
売り切れる瞬間が醍醐味
やりがいがあります
生産者と消費者の往来する
この交差点に立ってみたい

農と食
の邂逅

山田 千尋 さん

東京都大田区

東京青果株式会社 野菜第5事業部

昨年六月、卸売市場法改正が決定し来年施行。民間でも中央卸売市場の開設が可能となる。公共性と社会インフラが不安視され、農業の現場では高齢化、離農による生産力低下が課題だ。産地を育てる市場への期待は大きい。





P19: 富山県高岡市出身。明治大学大学院農学研究科(修士課程)卒業後、東京青果に入社(右)。この日は同僚の黒木則彰さんの競りのサポート役に回った(左) P20: 競り人の資格を持つ社員は、名前入りの帽子をかぶる(右上) 日頃から仲買人との情報交換を欠かさない(右下右) 売り先が決まった商品には名札が貼られる(右下左) 需要が供給より多い「もがき」と供給が需要より多い「なやみ」を調整するのが事業部の社員の腕の見せどころだという(左)

生産と消費の両方を見る

山田千尋さん(二八歳)にとって東京青果への入社は、米から野菜への転身だった。大学および大学院では稲の研究に没頭した。「実際に物が動く現場に身を置いてみたかった。卸売市場ならば生産と消費の両方が見られると思って決めました」

東京都中央卸売市場・大田市場の卸売業者である東京青果は、青果物流通では全国一位のシェアを誇る。二〇〇七年の新入社員約二〇人のうち、女性は四人だった。千尋さんは望み通り、産地から委託された野菜や果物を競りや相対取引を通じ、仲卸や小売店に販売する事業部に配属された。

そして、紅タデ、食用菊、芽ネギ、オカヒジキ、豆苗などの促成野菜や、脇役ながら料理には欠かせないつまものを扱うことになった。「最初は、物の流れを覚えるところから始めました。自分のやるべきことが分かり、納得できるようになるまで五年位かな」

相対取引が主流の今日にあっても、毎朝七時ごろから競りが始まる。取材に訪れた日、千尋さんが属する野菜第5事業部で競りにかけられていたのは、タケノコやマツタケなど値が張る商品や、ワサビや木の芽など個人名で出荷される商品などだ。

共同選果で出荷される商品は、買いに来た仲卸と千尋さんら競り人が直接商談して、値決めをしていく。お互いに知った中、ごくわずかな時間で取引が決まる。売り場を集

まる仲卸は、いずれもベテランの目利きの人たちだ。促成品やつまものという特殊性もあり、この道何十年という人も多いそうだ。

事務所に戻るとすぐに、産地と買い手の両方に連絡を入れる。買い手には需要を確認する。産地にはいくらかで販売できたのか、また新たな注文がどれほどあるのかを伝え、翌日の出荷量について話し合う。分刻みの気の抜けない仕事を終え、自宅に帰っても、すぐには仕事のことが頭から抜けないそうだ。

市場は二四時間動いている。千尋さんが帰宅した後も荷物は次々に入り、相対で取引された荷は、夜が明けぬうちに納め先へと積み出される。夜中であっても仲間から電話がかかってくることもある。「電話は、何かが起こったから。何も起こらないように、勤務時間中に頻繁に連絡を取り合うようにします。とにかく、買い手が求めている商品が手に入らない、欠品が起こらないように心掛けています」

緊張の中に感じる醍醐味

仕事場は場内だけではない。品目ごとに出荷が始まる時期と終わった時期に、産地に向く。扱う品目が多い分、訪ねる産地は必然的に多くなる。出荷前には、産地の出荷計画に基づいて規格や品質の打ち合わせをし、出荷後は反省会となる。直接顔を合わせ、情報を交換する貴重な機会だ。



夫の崇さん(右)は同じ高校の一年先輩。真ん中は息子の伶君。オフは「熱帯魚とネコをかわいがることです」と千尋さん

千尋さんの話を聞くにつれ、卸売市場での仕事が緊張の連続であることを実感する。なにしろ、市場が決めた価格は、産地の生産者の収益や経営を左右し、取引先の売り上げにも直結する。そうした緊張の連続の中にこそ「やりがいや張り合いを感じます」と千尋さん。

いつしか、事業部に勤務する女性社員の中で最年長になった。長年の経験と勘により「このぐらいの価格であれば生産者も買いうちも納得できるはず」という価格を形成し、それらが全て売り切れる瞬間は、市場関係者ならではの醍醐味を感じるそうだ。また、買い手から「どれほど値が高くてもいい

から集めて」と言われることも多い。注文が入るときはたいていどの産地も、また卸売市場も品薄だ。「そういうときに必要量が確保できると、これもまたうれしい」とほほ笑む。

売買の交差点に立ち続ける

一定の用途がある野菜やつまものも、生産者の高齢化や離農による生産力の低下が進んでおり、卸売市場にとっても悩ましい課題だ。そうした中であっても、後継者を育てながら世代交代を図っている産地、新たな品目の生産にチャレンジしている産地がある。「そういう産地の商品の扱うときは、やはり熱が入りますね」

産地が挑戦する新たな品目を聞くと、「タチカツラとかオカワカメ」を千尋さんは挙げた。タチカツラは寿司屋のガラスケースにネタとともに入っている飾り葉で、ササのような防腐作用もあるとか。輸入品が大半を占めるが、数少ない国産を増やそうという産地がある。オカワカメはツルムラサキ科で、葉が肉厚でゆでるとワカメに似ているそうだ。

新顔の品目以外でも、主に東北地方で生産される食用菊に新たな動きがあるという。九月九日の重陽の節句は別名を菊の節句とも言い、菊を愛で、菊酒や菊を用いた食べ物を楽しむ。これまであまり知られていなかったこの習慣が、SNSを通じここ数年で広まったことにより、節句の前には食

用菊の引き合いが増えるようになった。「時代の変化を捉え、出荷量を増やすなど積極的に対応しようとする産地には、今後ますます伸びていってほしい」と千尋さんはエールを送る。

千尋さんは入社前、「卸売市場とは、農業のコンサルティングをする場所」と聞いたという。入ってみて、その通りだと感じている。「市場って、産地が生産したものを売れるようにしていくための組み立てをしている場所ではないかと思っています」。例えば、買い手が産地との契約取引を望むとしたら、供給できる産地を探し、両者をマッチングさせながら、規格や数量、価格や品質など詳細を決めていく。まさに組み立てである。一方、すでに流通している商品についても、産地から「もっと売れるにはどうすればいいか」とパッケージやシールに対し助言を求められることがある。日々価格を形成し、膨大な取引を仲介する市場関係者ならではの視点でアドバイスができる部分がある。

部外者が卸売市場を眺めると、入ってきた荷物を淡々とさばく場所というイメージが強い。実際にはそうした仕事は一部にすぎない。人と人をつなぎ、「生産された青果物」を「売れる商品」に変え、流通させていく場所。生産と消費が行き来するこの交差点に、千尋さんは今後も立ち続けていきたいと考えている。

(青山浩子／文 河野千年／撮影)



輝く黄色の粒、チクチクする産毛と鮮やかな緑色。小さいころに母の実家を訪れた際の夏の思い出である。

もう遠い記憶になりつつあり、断片的なものとなってきたが、親戚の比較的大きな農家だったおばちゃんがいとも持ってきてくれた、採れ立てのトウモロコシや枝豆のおいしさは忘れることができない。

夏休みの思い出と言えば、大部分がこの記憶で占められていると言っても過言ではないくらいだ。いまだに、あの味を超えるものに出合えていないように思えるのは、おばちゃんの人柄も手伝わっているのかもしれない。

そんな甘いトウモロコシや枝豆を口いっぱい頬張っていた子ども時代には深く考えたことなどなかったが、気象予報士の資格を取り、仕事として気象に関わるようになってからは、自然と闘いながら農作物を育てるのはどれほど大変なことだろうと、思いをはせる。

以前、気象と農業についての連載コラムを書いていた時期があり、講演の機会もあった。講演会場では、時に「先生」と呼ばれることもあり、何だかすぐぐつたいような感じがしたのを覚えている。果たして有益な情報を発信することができたのだろうか、講演後は不安に感じたものだった。農業に携わっている方々は、実体験に基づいた知識をお持ちだからだ。

一日として同じ天気の日はない。さまざまな空模様を見てどれだけ知識を吸収してきたかによって、引き出しが変わってくる。今なら、また違った視点から話ができるかもしれない。

今年も台風シーズンがやってくる。言うまでもなく、台風は農作物に大きな被害をもたらす。夏の天候を左右する太平洋高気圧。これが弱いと、その隙をついて容赦なく台風が襲いかかってくる。近年は予想外というより、予想を超えてしまう現象が増えてきているように思う。

的確な気象の情報をお届けしなければ、と改めて襟を正す想いだ。



気象予報士
斎藤 恵理

さいとう えり
茨城県出身。2002年に気象予報士資格取得。気象キャスターとしてテレビやラジオに出演。日本農業新聞にて気象と農業に関するコラムを2年にわたり執筆。講演も行う。趣味は愛犬との旅行、野球観戦。

襟を正して

山形在来作物研究会代表
山形大学農学部教授

江頭 宏昌



● えがしら・ひろあき ●
一九六四年福岡県生まれ。京都大学大学院農学研究科修了後、山形大学農学部助手。二〇一五年より山形大学農学部教授。博士（農学）。専門は植物遺伝資源学。山形県内外の在来作物の研究や保存活動などに積極的に取り組む。著書に『人間と作物』（編著、ドメス出版）など。

一一〇一五年九月に国連サミットで採択され、一九三カ国が二〇一六〜三〇年までの一五

年間で達成すべき目標を定めた「持続可能な開発目標（SDGs）」には一七の目標が掲げられている。その一つ、「飢餓をなくそう」の中に「種子、栽培植物、飼育動物・家畜、およびその近縁野生種の遺伝的多様性を維持」することが含まれている。

われわれ人間が今後も安定して食を得ていくためには、将来の未知の社会ニーズに応え、環境ストレスや病害虫にも強い作物の新品種を開発し続けることが必要である。その開発に不可欠なのが育種素材となる国内外の在来品種や近縁野生種だ。これらの遺伝的多様性はできるだけ消失しないように保全することが大切である。しかし、在来品種は国内外で消滅の一途をたどっている。

在来品種とは、山形在来作物研究会の定義に従えば、ある地域で栽培者が自家採種などで世代を超えて種苗の維持管理をしながら生活に利用してきた

作物の品種をいう。なお、伝統野菜は、ブランド価値を高めることを目的として、伝統的な栽培地や栽培歴、郷土食との結び付きの有無などの条件を加えて、各地の生産者や自治体などで構成される振興協議会などが認定した野菜を呼ぶことが多い。

一般的に、在来品種は商業品種に比べ生産性が劣りがちだ。収量が上がらない、形質がそろわない、病気に強くない、日持ちが悪い、堅い・辛い・苦いなど食味にクセがあるなど、現代の価値観に合わない難点を持っている。

こうした在来品種は市場では受け入れられず、農家は「もうからんもんはいらん」という反応を示すことも多い。

優秀な商業品種が普及すると、それまで栽培されていた在来品種は消滅し、優秀な品種に置き換わる。これを遺伝的侵食と呼び、FAOは二〇世紀中に世界各地のさまざまな作物の在来品種が八〇〜九〇%以上消滅したと報告している。

筆

在来品種の多様性を守るには何が必要なのか？
者は二〇〇三年ごろから在来品種を栽培する国内農家を訪れ、在来品種の特性や栽培・利用の調査を始めた。黙々と種子を継いできた理由を聞くと、「おいしいから」「楽しみに待っていてくれる人がいるから」「自分の代で種子をなくすのは祖先に申し訳ないから」などの言葉が返ってきた。在来品種の消失を食い止めてきたのは、経済とは無縁の、品種への愛着や人々を想う気持ちだったと思いが知らされた。

二〇〇〇年より前、在来品種は冒頭で述べたような新品種開発の素材として、あるいは収穫物そのものをブランド化して付加価値を追求するのが普通だった。ところが二〇〇〇年前後かそれ以降は日本各地の団体が、在来品種にちなむ歴史や文化、焼き畑のような伝統的な栽培方法や利用の知恵などの文化的側面にも価値を見いだすようになった。
実際、筆者の住む山形県鶴岡市には五〇種類以上の在来品種があり広く市民に利用されていることが理由の一つとなつて、「エネスコ食文化創造都市」に認定されたり、鶴岡食文化創造都市推進協議会が

「鶴岡ふうどガイド」を育成して「温海あつみかぶ」などの生産地である焼き畑地を巡る観光ツアーを実施したりするようになった。在来品種が伝えてきた文化を活かすことが地域らしさの魅力を生み、在来品種の多様性維持への好循環につながる。

一方、食生活や価値観も変化し、在来品種の味も知らずに育った次世代に伝統的な栽培方法や食文化を継承できるかという、それも困難だ。次世代の人がおいしいと思う食べ方を工夫したり、栽培者が再生産可能な収益を生む仕組みをつくることも不可欠である。生産性は悪くても小さな経済を回し続ける工夫が必要なのである。

さらに言えば、自然災害や鳥獣害からの保護や、個々の在来品種には代々伝えられてきた採種のノウハウがあるため採種技術の継承対策も進めなければならぬ。

今日、自然災害、鳥獣害被害などが年々増大する中でそれらの対策をどうするかということも避けて通れない課題だ。他方、心の底流にある想いと共に先祖代々継承されてきた在来品種の特性を維持することも、重要な課題である。

F

在来品種が地域文化の魅力を生む 遺伝的多様性の保全こそ人類の義務

農業経営にガイドブック

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構
中央農業研究センター 農業経営研究領域長

宮武 恭一

今

日、農業従事者の減少と高齢化が急速に進む中で、「農地中間管理機構の活用等による農地の集積・集約化」と「担い手の育成・確保と人材力の強化」を柱とした農業構造改革が強力に推進されています。

農研機構中央農業研究センターでは、農地中間管理機構、全国農業会議所、日本農業法人協会などの協力をもらいながら、こうした課題に取り組む先進的な地域や経営の調査・分析を重ね、問題解決や経営改善に有効と考えられる仕組みや手法を分かりやすいガイドブックに取りまとめ、公表しています。

「農地集約化支援ガイドブック」では、担い手への農地集約化の取り組みについての実態調査分析を踏まえ、担い手への農地集約化の必要性和その具体的な効果を提示した上で、農地集約化（面的にまとまって担い手が利用できる状態）

に向けた取り組み方策について、「農地集約化に向けた推進体制作り」「地権者等への働きかけと人・農地プラン作り」「人・農地プランの実践と進行管理」の各段階に整理し、ここでの具体的な手順やポイントについて解説しています。

農地集約化の推進に直接関わる市町村行政、農業委員会、JA、普及組織の職員や農地利用最適化推進委員などの関係者向けに公表し

ました。

担

い手の育成・確保と人材力の強化に関して、「農業法人における人材定着施策と改善ツール」を公開しました。農業法人（七七四社）へのアンケート調査結果に基づいて、法人経営で問題となっている離職率の低減に効果がある労務管理施策を提示するとともに、従業員の定着を左右する従業員の職務満足度を簡易に計測できる「職務満足度分析ツール」を紹介したガイドブックです。このうち分析ツールは表計算ソフトのマクロ機能を利用して作られたシートになっており、職務満足度分析に基づく労務管理に活用できます。



研究成果を紹介したガイドブック

上記のガイドブック、および、職務満足度分析ツールは農研機構中央農業研究センターのサイト「農研機構・マネジメント技術」(URL: <https://fmrp.dc.affrc.go.jp>)からダウンロードできます。なお、このサイトでは、農地集約化や農業法人の人材育成以外にも、農研機構で開発してきた経営診断・経営計画支援や地域農業計画支援のための開発プログラム、地域農業動向予測や経営継承方策、集落営農の組織化や運営、農産物直売所の活用などの研究成果を紹介した刊行物についても広く掲載してありますので、ぜひ

訪問ください。

F



Profile

みやたけ きょういち
1965年香川県生まれ。88年筑波大学農林学類卒業後、農林水産省農業研究センターに入所。東北農業試験場、中央農業総合研究センター北陸研究センターなどを経て、2019年から現職。専門は大規模水田作経営の調査や米販売戦略の分析。



里山をまるごと一つのホテルに 身の回りの資源活かし生業の創造

石川県輪島市

株式会社百笑の暮らし代表取締役

山本亮



地域をホテルに見立てる

「のと里山空港」に降りて、輪島市街地方面へ車で五分ほど向かうと茅葺屋根の大きな建物が見えてきます。これが、「里山まるごとホテル」の拠点となる茅葺庵です。

石川県輪島市三井町は日本海へと流れる河原田川の源流部にあり、周りを標高一〇〇〇〜二〇〇以上の低い山々に囲まれ、山際には能登瓦と白漆喰で統一された家々が立ち並び、平野部には一面に田んぼが広がります。まさに日本の原風景です。

私たちは、そんな三井町の里山を一つのホテルに見立てて活動をしています。一般的なホテルのように一つの大きな建物の中に機能を詰め込むわけではなく、茅葺庵がホテルのレセプションとレストラン、地域に点在する古民家や農家民宿がホテルの部屋、直売所がお土産コーナー、和紙工房や農家さんの畑が体験コーナー、

日帰り温泉が大浴場、それらをつなぐ道路が廊下、といったように地域に今ある資源をホテルの機能に見立てているんです。訪れたお客さまには一施設にとどまるのではなく、能登の里山をまるごと楽しみ、ゆつくりとくつろぎながら、まるでこの地に暮らしているように過ごしてもらいます。暮らしの魅力や豊かさを知ってもらうことで地域のファンを増やす。三井町に関わる人、暮らしを受け継ぐ人の増加につながり地域の持続性を高められると考えています。

里山まるごとホテルでは「食べる里山」「泊まる里山」「遊ぶ里山」「癒す里山」と三井町の全てを感じてもらえるように四種類のコンテンツを用意しています。「食べる里山」として茅葺庵での食事提供、「泊まる里山」として農家民宿弥次の宿泊、「遊ぶ里山」としてサイクリングツアーや能登仁行和紙の紙すき体験、フォトツアーなど、「癒す里山」として能登産オイルを使ったリラクゼーションが楽しめるようになって

ています。なお、「泊まる里山」以外のコンテンツは日帰りの方も利用できます。

お客さまの希望に合わせて滞在プランのコーディネートも行っています。昨年、宿泊されたアールゼンチンのお客さまには「観光地ではなく、日本の昔ながらの暮らしに触れたい。また、お話し、お酒、お餅、お茶もやってみよう」という希望に合わせて二泊三日のプランを計画。弥次に宿泊し夕食は輪島のすし屋に、翌朝は弥次で用意したおにぎりを持って輪島朝市に行き朝市で選んだ干物を焼いて朝ごはんを食べてもらいました。夕食会場は輪島市街地、朝食会場は輪島朝市と見立てることで、他では施設内に抱え込んでしまうことを外に広げ、能登の魅力的な場所を活用できるようにしています。

また、これまでに培ったネットワークを活かして、酒蔵の見学やサイクリングをしながら紅葉の葉っぱを集めてつくるオリジナルの和紙すき体験、地元のじーじやばーばと一緒に餅つき

profile

山本 亮 やまもと りょう

1987年神奈川県川崎市生まれ。東京農業大学在学時に農村景観を保全するためのゼミ活動で輪島市三井町を訪れる。地域とのワークショップを行う中で里山の暮らしが持つ本質的な豊かさや持続可能性にほれ込み、移住を決意。東京での5年間のまちづくり業務を経て2014年に輪島市地域おこし協力隊として移住する。任期終了後、株式会社百笑の暮らしを設立し、代表取締役として里山まるごとホテルのプロデュースに取り組んでいる。

株式会社百笑の暮らし

「10年後に能登の里山里海と共にある暮らしが日本の豊かな暮らしの基準の1つになっている社会を創る」ことをミッションに2018年に設立。里山の暮らしの魅力を多くの人に伝えるため、里山まるごとホテルをプロデュース。拠点となる茅葺庵の運営などを実施。地域団体の「みい里山百笑の会」とは兄弟組織であり、経営に関することを「百笑の暮らし」で地域活動に関することを「百笑の会」で、と連携して活動する。

体験、古民家での茶道体験などを手配しました。ただ観光して終わるのではなく、人と人の関係を創り出すことを目指しており、アルゼンチンの方が帰るときには受け入れてくれた地域の方々が自然とお見送りに集まり、握手やハグをして、「また来てね」「Vendreadoravez(また来ます)」と言葉の壁を越えた関係が生まれました。

里山まるごとホテルは当社の自主事業として行う部分と信頼できるパートナーと連携して進めている部分があります。二〇一八年時点では、全体コーディネート、レセプション&レストラン機能を持つ茅葺庵の運営、サイクリングツアーの運営、リラクゼーションサロンのスペース提供を当社の事業として行っています。農家



上:農家民宿弥次での夕食。能登野菜などをつかい郷土色豊かな料理が並び
下:三井町の里山と茅葺庵。里山まるごとホテルは三井町の里山があっこそ成り立つ

民宿弥次は地域活性化の仲間である西山夫妻の事業、遊ぶ里山の和紙すき体験は能登仁行和紙の事業、フォトツアーは輪島の写真家の事業、癒す里山のリラクゼーションサロンは私の妻と仲間のセラピストの事業です。他にも「山野草が好きできれいに花が咲く場所をたくさん知っている。お客さんが来たら案内してやるぞ」という地域の方が現れたり、沖繩でタイ古式マッサージをしていた三井町出身者がUターンして当社のサロンを使ったりと少しずつ人と場の輪が広がっています。

始まりは直売イベント

二〇一四年、私は輪島市地域おこし協力隊としてこの地に移住しました。三井町はもともと

林業が中心の町でしたが、木材価格の低迷などによって林業従事者の減少、製材所などの周辺産業の閉鎖が進み、過疎・高齢化が大きな課題となっています。また、それに伴って空き家の増加(五、六軒に一軒が空き家)が起こり、美しい里山風景も徐々に荒れてきています。

地域を活性化させこの美しい風景を後世に残せないかと地域の方にヒアリングをしていると「昨年やった直売イベントが楽しかった。継続してやりたかったけれどまとめ役がいなくてできなかった」という声を聞き、茅葺庵前の芝生広場での直売イベントの定期開催を始めることにしました。前年の出店者から声掛けを始め、五月から毎月の運営会議で案を練りつつイベントを開催していると、「地域を盛り上げたい」という方

や「自分が作った自慢の野菜を売りたい」「訪れた人に三井町を知ってもらいたい」という方など地域や里山に対して熱い思いを持った人が集まってきました。

イベントが開催できない冬場になると、地域活性化のために自然と他にも何かやろうと話し合うようになり、視察や会議を重ねました。その中で、三井町には県内の温泉街向けに葉っぱビジネスをやってきた歴史があるが、販路を広げる活動をしてこなかったこと、和菓子会社から能登のヨモギを大量に欲しいという話や、茅葺職人さんから茅葺屋根の原料が全国的に足りないという話を聞き、身の回りにある里山から得られる資源を活かせば生業なりわいがつけられるのではと盛り上がりました。

そして、二〇一六年四月に地域の方約五〇人と、里山の資源を活かした生業と笑顔をつくる団体として「みい里山百笑ひやくしょうの会」を設立し、会員のやりたいことに応じて加工品を作る食部、茅を生産する茅部、イベントを継続的に開催する里山の市部、葉っぱビジネスの拡大を目指すつまもの部、交流人口を増やすための観光部の五つの部会に分かれて活動を始めました。その後、みい里山百笑の会、輪島市役所、当社で「里山まるごとホテル推進協議会」を設立、現在は地域や行政と情報を共有しながら活動しています。

地域の拠点を再生し活性化

観光部として、農家民宿をやりたいという地域の方のサポートをしたり、モニターツアーを行い、里山の食や暮らしの体験メニューをつ

くったり、東京農業大学の受け入れ支援などを行う中で、地域の拠点である茅葺庵の魅力が低下していることが気掛かりになっていました。茅葺庵は輪島市役所が地域活性化のために造った施設で、指定管理者制度によって三年ごとに管理者を募集・選定するかたちで運営されています。選定委員会の審査で二〇一五年度から地域外の団体へと管理が変わったものの運営がうまくいかず、掃除も行き届かなくなり、地域の方も寄り付かず一日に五人も利用しない場所になっていました。また、一四年まで管理していた地元団体は高齢化などが理由で解散。このままでは茅葺庵が魅力のない場所としてさびれていってしまうと危機感が募り、自分自身が中心となって運営することを決意し、一八年度からの管理者募集に手を上げました。

イタリアの先進事例を参考

茅葺庵の運営方法を考える中、思い出したのが東京農大の合宿がきっかけで三井町にのめり込んでいった自分の姿。観光地を巡るのではなく、地域の人と会い、その暮らしを垣間見ることが楽しかったことでした。そしてその暮らしの価値は、能登の里山、里海が一一年に日本で初めて世界農業遺産に認定され、世界からも認められています。茅葺庵に来て終わりではなく、茅葺庵をきっかけに地域へと人が染み出していき、地域の暮らしに触れられる仕掛けをしたいと思い、イタリアのアルベルゴ・ディフーズ（分散型宿泊施設）を参考にしながら生まれたのが里山を一つのホテルに見立てる、里山まるごとホテ

ル構想でした。

この想いを日本最大のソーシャルビジネスの祭典「みんなの夢AWARD」で発表したことで、一般社団法人ソーシャルビジネスドリームパートナーズからの出資交渉権、大手企業など一五社との連携機会を手に入れ、準備が加速しました。そして一八年一月に指定管理者の選定委員会から選定を受け、二月に「百笑の暮らし」を設立、四月に茅葺庵の運営スタートと合わせて里山まるごとホテルをオープンしました。

まるごとの輪を広げる

現在、空き家となっている古民家をリノベーションし、二〇二〇年には一棟貸し型の宿を、二〇二一年にはゲストハウス型の宿のオープンを予定しています。地域課題となっている空き家ですが、所有者の方に賃貸や売買の意向がないため活用が進まないのが現状。空き家を活用して宿の機能をつくっていくことで地域課題の解決を図りたいと思っても当初はなかなか賛同してくださる所有者が現れませんでした。ですが、地域に理解者が増え、いい物件と巡り合うことができました。ゆっくりとくつろぎたい方は一棟貸し型へ、地域の暮らしにどっぷり漬かりたい方は農家民宿型へ、安く長く泊まりたい方はゲストハウス型へと好みに合わせて滞在できる空間へと育てていきたいと思っています。

これからもしっかりと地域と手をつなぎ、里山の暮らしの豊かさを楽しめるよう行動しながら、里山に育つ木のように少しずつ里山まるごとホテルを育てていくことを目指します。

『珈琲の世界史』

日部 幸博 著



(講談社現代新書・800円 税抜)

謎めく珈琲の旅を味わう

青木 宏高

(NPO法人「良い食材を伝える会」理事)
この本はコーヒーの歴史書である。歴史書には、どこか堅苦しいイメージがあるが、本書は、楽しみながら、気持ちよく読ませる。この本を書いた日部さんは「コーヒーの通史」に挑戦する。その歴史は気の遠くなるような時間で、五千年余の歴史と言われる茶よりはるか遠い昔にヒトと巡り合っていたという可能性も指摘されている。謎めくコーヒーの旅は一章から一〇章に、序章と最終章を加えた二五〇頁余の労作である。コーヒーの原料はコーヒーノキというアカネ科植物の種子で、これを焙煎し抽出して飲用する。原産地はアフリカ大陸エチオピアで、高地に自生する。この辺りは人類発祥の地と言われ、ここがコーヒーの故郷というのも、どこかヒトとの運命を感じる……。『コーヒーはモカ』と称賛される世界的ブランドの、由来をご存じだろうか？

エチオピアと紅海を挟むアラビア半島イエメンの港名だが、コーヒーを世界に送り出したきた積み出し港。歴史を彩る一ページは、今もコーヒーの世界に残る(三章「イスラーム世界からヨーロッパへ」)。

コーヒーがヨーロッパ大陸に渡り、イギリス、オーストリア、フランス、オランダ、ドイツなどに広く愛飲されていく(四章「コーヒーハウスとカフェの時代」〜八章「黄金時代の終わり」)。

ところが、カフェ・ド・フォワでの演説が口火になりフランス革命が成功すると一変する。主役はナポレオンである。周辺諸国は同盟を結び対抗するが、ナポレオンは反攻し、大陸全土を勢力下に治め、大陸封鎖する。植民地から輸入がストップ。コーヒー不足がナポレオン打倒にドイツ人を駆り立てたという。そんな記録が残る。

ナポレオンは大のコーヒー好きだったと伝えられている。世界のコーヒーを動かした偉大な皇帝も、流刑中に、最期はたったスプーン一杯のコーヒーも自由にならなかった。そして、ヨーロッパからアメリカへ、コーヒーの主役は動いていく(一〇章「スペシャルティコーヒーをめぐって」〜最終章「コーヒー新世紀の到来」)。

さて、日本人でコーヒーを最初に飲んだ人物は誰なのか。文人大田南畝(蜀山人)がオランダの船で飲んだ感想を書き残している。「豆を黒く炒りて粉にし白糖を和したるものなり、焦げくさくして味うるに堪えず」。そう記している。

今日、日本は世界三位の愛飲国である。



読まれています 三省堂書店農林水産省売店 (2019年6月1日〜6月30日・税抜)

タイトル	著者	出版社	定価
1 最後の砦——漁業取締りの流儀	橋本 高明/著	文芸社	1,400円
2 森林未来会議——森を活かす仕組みをつくる	熊崎 実、速水 亨、石崎 涼子/編著	築地書館	2,400円
3 米と平成〜30年間の流通〜	「米麦日報」編集部/編	食品産業新聞社	2,700円
4 誰も農業を知らない：プロ農家だからわかる日本農業の未来	有坪 民雄/著	原書房	1,800円
5 新スマート農業——進化する農業情報利用	農業情報学会/編	農林統計出版	5,000円
6 スマート農業のすすめ 次世代農業人【スマートファーマー】の心得	渡邊 智之/著	産業開発機構	1,800円
7 儲かる農業2019 週刊ダイヤモンド 2019年3月9日号	週刊ダイヤモンド	ダイヤモンド社	657円
8 よくわかる 国連「家族農業の10年」と「小農の権利宣言」	小規模家族農業ネットワークジャパン/編	農山漁村文化協会	1,100円
9 農業情報技術の革新「農業と経済」2019年4月臨時増刊号	「農業と経済」編集委員会/編	昭和堂	1,700円
10 農業保護政策の起源 近代日本の農政1874〜1945	佐々田 博教/著	勁草書房	3,500円

アジア太平洋地域の農業金融発展に協力

日本政策金融公庫は「第七一回アジア太平洋農村・農業金融協合理事会」をホスト機関として開催しました。日本での開催は一九九八年の第三八回理事会以来、二〇年ぶりとなりました。

アジアの農業発展を支援

アジア太平洋農村・農業金融協会（略称：APRACA）は、アジア太平洋地域の農村・農業制度の改善を図るため、一九七七年に設立された三つの付属機関を擁する国際機関です（図）。現在はアジア太平洋地域二四カ国の農業金融機関など八六機関が加盟しており、日本では日本公庫が唯一の加盟機関となっています。

設立の目的として、①域内農業発展に必要な金融制度改善等の相互協力、②農業金融に関する組織的な情報交換と加盟機関に共通する問題についての国際的研究促進、③各地域の農業金融に関する教育プログラムの策定、④FAO（国連食糧農業機関）およびAPRACA

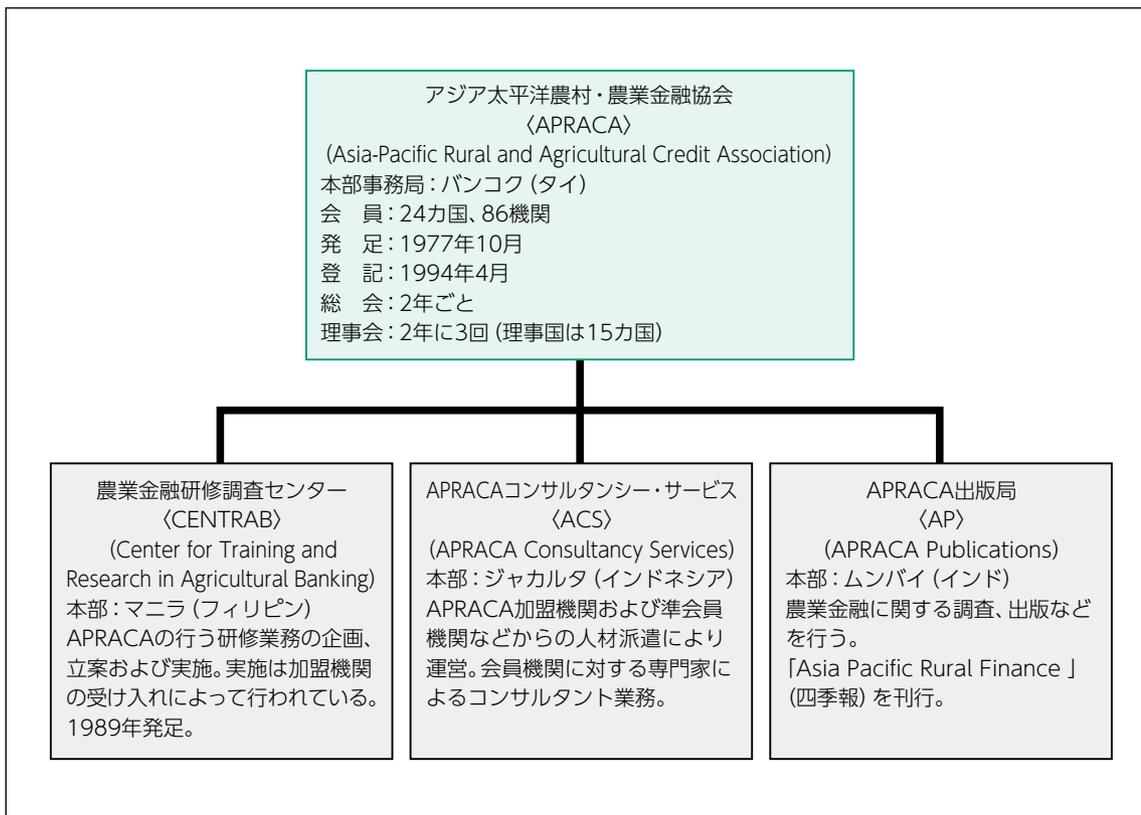
Aと同様の目的を持つ他組織との交流を掲げ、農村部の貧困解消に向けたマイクロファイナンスに関する調査研究とノウハウの共有をはじめ、途上国の人材育成支援やセミナーの開催などさまざまな活動を行っています。

日本公庫では、日本の農林水産業と農林水産金融への理解を深めるための研修機会を提供。九八年の研修開始以降、一九九九年のべ九一人を受け入れています。昨年の研修ではネパール、パキスタン、スリランカ、カンボジア、マレーシア、インド、フィリピンの農業金融関係者一五人の研修生を受け入れ、千葉大学の植物工場や埼玉県の先進農業者を訪問。地元JICAにも足を運び、日本の農業に関する最先端の現場を視察しました。

二〇年ぶりに日本で開催

六月六・七日に東京都で開催された今回の理事会には、一五カ国三一機関から六二人が参加。今後のAPRACAの在り方を定める

図 APRACA組織概要





国際フォーラムでは活発な質疑応答が

「APRACA六カ年計画」の策定について協議されたほか、付属機関と各加盟機関が共催・参加した会議や政策フォーラム、視察などについてのさまざまな活動報告がありました。

APRACA六カ年計画においては、「農業金融および地域開発における優良事例や解決方法の共有」「研修や調査を通じた農業・地域に係る金融および経済開発問題



理事会の様子



ローズガーデンホテル新宿にて

の理解促進」など従来から目標とする内容の継続が決議されたほか、APRACAの組織運営について、近年の農業金融の環境を鑑み、フィンテック革命や金融包摂(※)などの新たな視点を盛り込んだ体制強化を図るべく、議論が交わされました。

また、農業バリエーションに係る調査、世界の貧困層削減のケーススタディーに係る調査、中



日本文化に親しむため、理事会の翌日は浅草観光へ

小企業への金融サービスに係る調査など、研究の一環として行われている活動についても報告されました。

震災関連の支援を報告

理事会と同日に開催された国際フォーラムでは、「天災からの復興における金融機関の役割」をテーマとした三つの発表がありました。日本公庫は「東日本大震災からの

復興状況と日本公庫の役割」と「原子力災害による風評被害払拭ふうせつばいしょくに向けた政府の取り組み」について報告しました。震災被害額が農林業分野でも水産業分野でも、それぞれ一兆円以上あった事実を示し、宮城県のイチゴ産地と石巻漁港の復興状況について説明。また、今なお残る原子力発電所事故の風評被害についても報告しました。さらに、震災から現在に至るまでの震災関連の公庫の融資状況を、個別の事業者への施設再建に係る融資事例を交えて紹介しました。参加者からは「日本のセーフティネット融資制度が理解できた」「具体的な復興融資事例が分かりやすく参考になる」などの感想が聞かれました。

そのほかフィリピンとバングラデシユの金融機関からは、自国の農村地域と農村にある零細企業への包括的な振興策と事例紹介があり、各国の農業金融について情報交換が行われました。

(情報企画部)

※金融包摂(Financial Inclusion)：通常の金融サービスを受けられない人々が融資などの金融サービスにアクセスできるとのこと。

みんなの広場

◆六月号「農と食の邂逅」で紹介された、畑直送の新鮮イチゴを活かしたスイーツ作りをしている吉野ひろみさんたちの活動は、女性ならではの視点で町の活性化に一役買っているようだ。

カツオの一本釣りで知られる中土佐町が新しい産業を模索する中で誕生したイチゴ農家の女性たちの店。新鮮なイチゴを生で楽しんでもらいたいと始めたケーキ作りが軌道に乗った。

今は早くも次の段階。後継者育成が課題だぞうだ。吉野さんらの力で若い人たちが必ず育つと私は確信している。男のカツオ、女のイチゴで中土佐町がますます活気ある町になることを期待したい。

(広島市 巨 幸男)

◆農業は急速な人手不足に苦しんでいる。国の根幹的産業であるのに、農村部の高齢化や3K的な側面など課題が山積しており、外国人の労働力に依存する農村も出ているという話も聞く。

そんな中で、六月号の特集にあった障害者福祉サービス事業所が本格的に農業生産に取り組み例が素晴らしいと感じた。この「農福連携」は障害者の就労範囲を広げるとともに、農業の生産性向上にもつながるといふ点で大いに期待できる。新

しい農業の形として全国に広がり、定着することを望む。

(広島市 内 惻)

みんなの広場へのご意見募集

本誌への感想や農林漁業の発展に向けたご意見などを同封の読者アンケートにてお寄せください。「みんなの広場」に掲載します。二〇〇字程度ですが、誌面の都合上、編集させていただきます。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記してください。掲載者には薄謝を進呈いたします。

「郵送およびFAX先」

〒100-0004

東京都千代田区大手町一丁目九一四

大手町フィナンシャルシティノースタワー

日本政策金融公庫

農林水産事業本部

AFCフォーラム編集部

FAX 〇三三三三〇一三三五〇

メール配信サービスのご案内

日本公庫農林水産事業本部では、メール配信による農業・食品産業に関する情報の提供をしています。メール配信を希望される方は、日本公庫のホームページ(https://www.jfc.go.jp/n/service/mail_nourin.html)にアクセスして会員登録ください。(情報企画部)

編集後記

◆人手不足が深刻化する中、いかにして従業員を育て、職場に定着させるか、多くの農業経営者が頭を悩ませています。正解と呼べるものがないのがまた悩ましいところ。特集記事で紹介されている鈴木、経営紹介で取り上げたナカシヨクの両社に共通することは従業員への権限委譲。他社の取り組みから学ぶのも一つの手段です。(西山)

◆特集で触れられていますが、パソナ農援隊卒業生の阪下さんは「農業界の現状などについてトッププランナーに講義いただき、参入への想いを新たにしたい」と強調されています。新規就農者の定着には技術習得などもさることながら、就農者の確固たる経営理念、農業への情熱などの醸成が不可欠。研修側の長期的視点の重要性を痛感しました。(高雄)

◆六月二八日発表の「二〇一九年農業構造動態調査」によると、全国農業経営体数は一八年より二・六%減少、二〇万経営体を割り込みました。組織経営体数と法人組織経営体数の増加率は鈍化傾向で、常雇い数も減少しています。改めて厳しい現状を認識しましたが、数値では見えない現場の皆さまの実情、お考えはどういったものでしょうか。(城間)

◆「変革は人により」で初めて耳にした「苗半作」「苗七分作」という言葉。野菜を手にするときに畑に植えられる前の苗のことを考えたことはなく、私たちの食卓は竹内園芸さんのような種苗会社の技術と努力にも支えられていたんだなあとありがたく思いました。夏真っ盛り、今年もトマトやキュウリをモリモリいただきます！(竹中)

AFCフォーラム Forum

- 編集

前田 美幸	西山 大也	高雄 和彦
山本 晶子	城間 綾子	竹中 夕美
鈴木 晃子		
- 編集協力

青木 宏高	村田 泰夫
-------	-------
- 発行

(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部
Tel. 03(3270)2268
Fax. 03(3270)2350
E-mail anjoho@jfc.go.jp
ホームページ <https://www.jfc.go.jp/>
- 印刷 凸版印刷株式会社
- 販売

株式会社日本食糧新聞社
〒104-0032 東京都中央区八丁堀2-14-4
ヤブ原ビル
Tel. 03(3537)1311
Fax. 03(3537)1071
ホームページ
<http://info.nissyoku.co.jp/koudoku/>
お問い合わせフォーム
http://info.nissyoku.co.jp/modules/form_mail/
- 定価 514円(税込)

◆ご意見、ご提案をお待ちしております。
◆巻末の児童画は全国土地改良事業団体連合会主催の「ふるさとの田んぼと水」子ども絵画展の入賞作品です。

国産にこだわり
農と食
をつなぎます。

第14回 アグリフードEXPO 東京 2019

プロ農業者たちの国産農産物・展示商談会

日時

8月21^水日/22^木日
10:00~17:00 10:00~16:00

主催

日本政策金融公庫

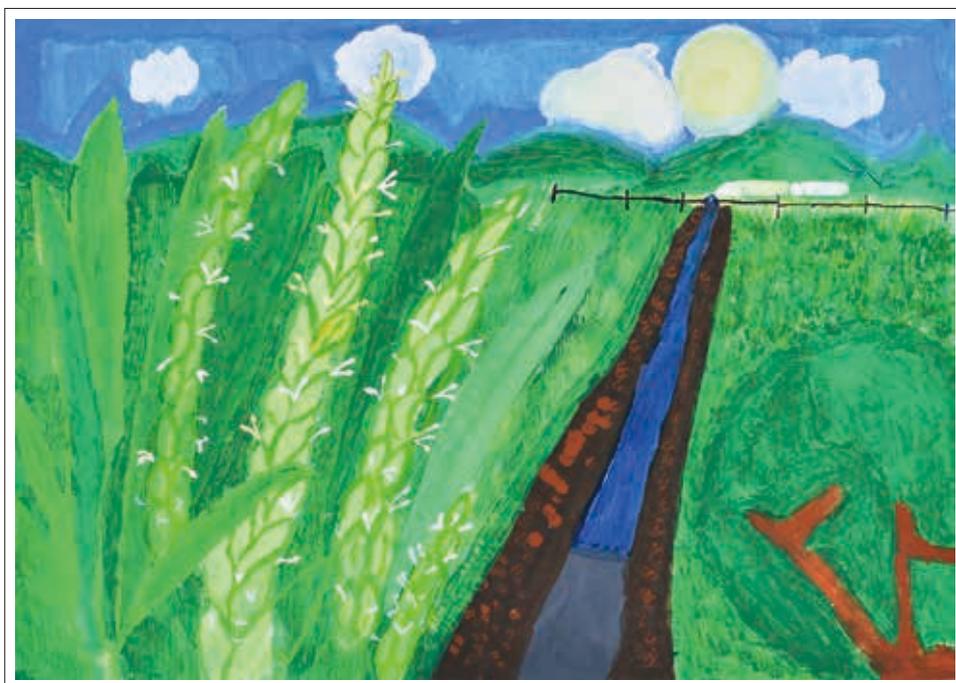
会場

東京ビッグサイト 南展示棟



●次代に継ぐ

農業人材育成の今を追う



『稲に花がさいてたよ』 桑原 ひなの 青森県十和田市立北園小学校

■ AFCフォーラム 令和元年8月1日発行(毎月1回1日発行)第67巻5号(828号)
 ■ 発行 / (株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-9-4 Tel:03(3270)2268
 ■ 販売 / 株式会社日本食糧新聞社 〒104-0032 東京都中央区入丁堀2-14-4 47原ビル Tel:03(3537)1311 ■ 定価514円

【本誌面割476円】



JFC 日本政策金融公庫 農林水産事業本部

<https://www.jfc.go.jp/>